

猫

の

草

紙

猫の草紙

慶長一傍訓原本
のまゝ
ひとしく同時
に

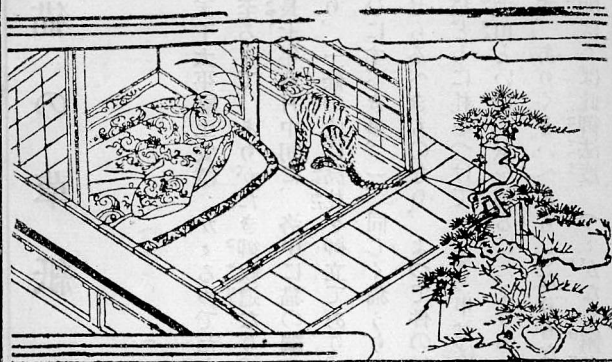
遊山といひ一目
由に遊行も出来
さなりもなく
小鳥の意にて音
せぬことか
きのうまき事
きは機なるべし

天下太平國土安穩、かゝるめでたき御代にあふこと、人間は申すに及ばず、鳥類畜類に至るまで、ありがたき御政道なり。まことに堯舜の御代にも勝れたることなり。まづ慶長七年八月中旬に、洛中に猫の綱を解きて放ち給ふべき御沙汰あり。ひとしく御奉行より、一條の辻に高札を御立てあり。そのおもてに曰く、一洛中猫の綱をととき、放ちがひにすべき事。一、同じく猫うりかひ停止の事。此旨相背くにおいては、堅く罪科に處せらるべきものなり、よつて件の如し。右かくのごとく御政道ある上は、ひそひそ々祕藏せし猫どもに札をつけてはなち申せば、猫斜ならず喜びて、こよかしこに飛びまはること、遊山といひ、鼠を捕るにたよりあり。程なく鼠おぢ恐れて逃げかくれ、桁梁をけらうもはしらず、ありくといへども、さなりもなく、忍びありきの體なり。かゝるきのうまき事なし。願はくば此御法度、つゝがなく懈怠する事なかれと、萬民かくの如し。爰に上京邊の人

けろくわんのふ
たつ—教觀の二
つにて教相觀心
の二門をいふ

れん—退々
か

さんぎ—さんぎ
(慚愧)か



なりしに、よにたつとき御發心者あり。惡を捨てて善にすゝみ、あしたには天長地久、夕には現世安穩、後生善所のいたり、法界平等利益と願ひしけうくわんのふたつ明かなり。道俗男女、殊勝感涙をながす。誠に大日如來ともいつべし。かゝる殊勝の道理をば、鳥類までも知りはんべるか、ある夜不思議の夢をみる。鼠の和尚とおほしきが、進み出でて申すやう。御僧様へむかひ詞をかはすこと、憚りに存じ候へども、御教趣のほど、れん—椽のしたにて、日夜朝暮御談義を聽聞仕り候ふに、懺悔に罪を滅すと仰せられ候ふについて、まかり出でて候ふなり、さんぎ懺悔をも仕り候はゞ、一句の御道理をも、御授けあつて下され候へかすと申しければ、

僧答へていはく、汝らがふぜいとして、かゝるやさしきことを申すものかなと、なのめならず思ひ、草木國土悉皆成佛となれば、非情草木も成佛すと見えたり、況や生ある物として、一念彌陀佛則滅無量罪、唯心（ほろしん）の彌陀（みた）、己身（こしん）の淨土（じやうど）なり、爰を去ること遠らずと説き給へば、たとひ鳥類畜類たりといふとも、一念の道理によつて成佛せずといふ事やあるとのたまへば、さらば懺悔の物語を申し候はんとて、鼠鳴きのなんだを押拭（おしのぎ）ひ申すやうは、今度洛中の猫の綱をはなされ申すゆゑ、我々一門悉く影をかくし、或は逃げ、或は亡び、今すこし残り申すものども、けふあすの命と思ひ、心細くいしするのかけ、椽の下にかどむといへども、寸（すん）の油斷も候はず、又穴の住居（すまひ）を仕りて見るといへども、一日二日の事にもあらず、中にばかりも息（いき）ごもりてゐられ申さず、たま／＼憂き世間へまかり出でんとすれども、しや取つておさへ、あたより噛みひしがれ、しゝむらを引きさかれ、かゝるいぶせき事に逢ひまつる事、前世の因果悲しうこそ候へと申せば、僧答へていはく、汝らがしほたれて言ふ所いたはしく思ふなり、殊に一句をも授けたれば、弟子（でし）同前（どうぜん）に思ふなり、まづ／＼くせごに人に憎まるゝ事を、語つて聞かすべし、わらは如きのひとり法師、たま／＼傘（からかさ）をはりたてて置けば、やがてしまもとをくひ破り、又旦那をも

六條—六條の袈裟

御たとへ—例を引きていはれし話

あらひほうしやう云々—未詳
ちやこ—茶子にて茶汲女か
あかはだかつ紐の時—毛の生えぬ幼少の時
かぶきたるなり—ふさげたる姿

てなさんとて、いり豆座禪豆をたしなみ置けば、一夜のうちにみなにし、袈裟衣ともいはず、扇、物の本、張付屏風、かき餅、六條などをたまらせず、いかなる柔和忍辱の阿闍梨なりとも、命を絶ちたき事勿論なり、いはんや大俗の身にては道理至極せり。其時鼠答へていはく、我らも御たとへの如く存じて、わかき鼠どもに意見をなすといへども、忠言耳にさかひ、良薬口ににがしと申せば、中々聞きも入れず、なほく惡逆つかまつらんと申す、そのなかにも、まづ第一、人に憎まるゝこと勿れ、お東どの、お北どのの、あらひほうしやうつきおひ、ちやこ、おはしたの前垂、かたびら、足袋、また袴、肩衣のはし、唐櫃のすみ、つよみ、葛籠の中へとりこもりて家を作り、餌食にもならず、手柄にもならざる物をくふこと勿れ、壺のはたなどまはるなと、あかはだか、つけ紐の時よりも申し聞かせ候へども、かぶきたるなりばかりを好み、人の枕もと、こも天井ふる屋根などをすみかとして、惡逆ばかりを仕り候ふ事、是非なき體と、語り申すうちに夢さめて、既にその夜は明けにけり。又つぎの夜の夢に、虎毛の猫來り、けに／＼しく語り申すやう、御僧様たつときにより、鼠根性として、人の憎むやつにて候ふ、かゝる奴原まゐりて、いろ／＼の事を申すよし、やがて告げ知らするかたあり、總じてかの鼠と申

外道の上盛—惡魔の骨張

その子細—その理由
柏木のもと—源氏物語の柏木右衛門督の事をいふ

たいりやく—大略にて概しての意
にふがく—未詳

なせんさんみ

すは、外道ひだうの上盛うはもちなるべし、御僧の御慈悲を垂れ給ひても、やがて物をひかん事必定なり、又我らの系圖をあらく語り申すべし、聞召し候へ、箇様に申し候へば、鼠とたけくらべのやうに候へども、いはれをしるし召されずば、いやしめ給はんまゝ、猫背中ねこせなかにおしつくばひ、大の眼まなこに角をたて申すやう、われは是天竺てんじく唐土たうどにおそれをなす虎の子孫なり、日本は小國なり、國に相應してこれを渡さるゝ、その子細によつて、日本に虎これなし、延喜の帝みかどの御代より、御寵愛あつて、柏木かしはぎのもと、下簾したすだれのうちに置き給ふ又後白河の法皇の御時より、綱を付けて腰もとに置き給ふ、綱のつきたるゆゑに、一寸さきを鼠徘徊するといへども、心ばかりにて取りつくことならず、湯水ゆみづのたべたき時も、咽のどを鳴らし聲を出だしてたべたけれども、あたまをはりいためらるれば是非なし、詞を通ずといへども、天竺てんじくの梵語まんごなれば、大和人やまとびとの聞き知ることなし、たいりやく繋ぎ殺さるゝばかりなり、にふがくの御慈悲廣大にて、賤しづが伏屋ふせやに月の宿り給ふがごとく、猫風情までに御心をつけさせ給ひ、綱をとき、苦をゆるさるゝことありがたき御事なり、此君の御代、五百八十年の御齡をたち給へと、朝日にむかつて餘念なう、のんどを鳴らし拜み申すなり。僧答へていはく、猫のいはれやう、近頃神妙しんべうなり、なんせんさんみ

やう―南泉三明

あつかひ―仲載

さんりん―三輪
か

くごにかつうを
―くごは供御上
り轉じて食物の
義、かつうをは
たつくり―ごま
め

堪忍のこと―鼠
を食ふをやむる
こと

やうの心を思へば、きるよともいかでかへん、さりながらこゝに詫びたき事あり、出家の役にて、かやうの事を見てはおかぬ法なり、あつかひに入りたきとのことわりなり、殺生ばかりをするものは、因果車輪の如く、死しては生じ、生じては死し、流轉にさんりんしては、其因果のがれ難し、一切のこくうをしらんによつて、生死もろくの諸惡をはなれ、三界六趣輪廻生滅して、すなはち解脱を得ると見えたり、殺生をやめられ候へ、其方の食物には、くごにかつうををませて與へ、またをりくはたつくり鮮乾鮭などを、朝夕の餌食には、いかごと問ひ給へば、御諛の如くにては候へども、まづく案じても御覽ぜられ候へ、人間は米をもつてこそ、五臓六腑をとよのへ足手達者に利口をものたまへ、山海の珍物は、飯をすゝめんがためなりとうけ給り候へば、われくもその如く、天道より食物にあたへ下され候ふ故に、鼠をたべ候へば、無病にして飛びありくと、鳥にも劣るまじと存じ候ふなり、またゆるくと晝寢つかまつるも、鼠をたべんと存ずるためなり、しかるを今より堪忍のこと、同心申しがたし、御分別候へと申せば、さしも廣大無量の御僧なれども、返答しかね、感涙肝を消すばかりなり。

夢さめて、曉がたにまどろめば、例の鼠きたつて申すやう、とかく此體にては、京中の堪

命の中たがひ
生命をすつるこ
と

かざーにはひ

めんあひー未詳

木のもとー伊香
郡木之本

忍なりがたしとて、上京下京の鼠どもよりあひ、ふれをまはし、にしぢん組は舟岡山のす
そ、小川組は御靈の藪、立賣組は相國寺の藪、聚樂組は北野の森、下京組は六角堂のう
ちへ、よりあひく談合す。其中に分別顔する鼠、すゝみ出でて申すやう、所詮此體な
らば、命と中たがひの外はあるべからず、いかゞしてか此度の命のびなんと、いろく
評定したりけり。はや都の御ふれ、五十日になるといへども、魚の骨を一つ齒にあて
ず、油あけ、やき鳥のかざをだにもかゝらず、猫どのに参りあはねば、自然に干死にまか
りなるなり。

きつと案じいだしたる事あり、此程聞き及びしは、近江の國御檢地ありしかば、めんあ
ひについて、百姓稻を刈らぬよし、慥に聞きとどくるなり。まづく冬中はまかりこし、
稻の下に妻子共をかどませ、年をこえ暖にならば、きたの郡、木のもとの地藏をたのみ、
ゆんでめての山々、伊香郷山、おくだに山、おそろしけれど膽吹山に關が原、醒が井、摺
針、佐和山、たかのはた所の山、はくさんじ山、かみかまうのこなりのはた、ふせ山、布
引山、觀音寺、八幡山、鏡山、朝日山、ここの郡わしの尾の山、村々里々、三上山、信樂
山、石山、栗津、まつもと、打出の濱、長柄山、園城寺、延曆寺、坂本、堅田、比良、こま

きんへん―近邊
か

つ、白鬚の明神きんへん、うちおろし、今津、海津、しなづ、志賀の浦、便船あらば
竹生島、ちやうめんじ、おきの島などへもおし渡り、野老蕨などを掘りくひ、一旦身命
をつなぐんと存じ候ふ、何より心の残り候ふは、やがて正月に、かどみ、はなびら、煎
餅、あられ、かき餅、おこし米など、春雨の中徒然なくさみにかぶりくひて、じよめい
て遊ばんとたくみしに、大敵の猫どのに、おつ立てられ、のき退くこそ無念なれ、さり
ながら猫どのも犬といふこはものに、あそここを追ひまはされ、辻川にたふれふし
雨露にしほたれたるを見れば、報いありと勇みつゝ、方々へのき退く。その中に公家
門跡などに久しくすみける鼠、三首の腰折をつらねたり。

鼠とる猫のうしろに犬のゐてねらふものこそねらはれにけり

あらざらん此世の中の思ひでに今一たびは猫なくもがな
じよといへば聞耳たつる猫どののまなこのうちの光おそろし

僧心に思ふやう、かゝることわざ人に語るならば、狂氣とや風聞せん、深くつよしむべし
と思へども、まれなる夢のたはぶれば、近き友に語り傳へ、笑草かなといへば、仰せの
ごとく、鼠うすくなり物をもひかず、枕本をもありかず、かやうの御政道は昔が今にい

たるまで、ありがたき御事なり、君もゆたかに民さかえ、久しくめでたき事ばかりにて、
心ゆるがせなるのみなり。